

No. 924

ヨーロッパ絵画の全貌

—ボルドー美術館名作展—

ヨーロッパ美術の莫大なコレクションを擁していることで世界に名高いボルドー美術館（フランス南西部・ボルドー市所在）の名作展が今、名古屋市東区の愛知県美術館で開かれています。中日新聞が新社屋の完成を記念して主催したものです。

一般公開に先立ち、17日10時から高松宮殿下、駐日フランス大使、大島一郎、小山竜三中日新聞両社主ら多数が出席して開会式が行なわれました。

高松宮殿下、バード仏首相代理、三浦中日新聞社社長がテープカット、続いてボルドー美術館長マルタン・メリー女史の案内で名作の鑑賞にうつりました。

会場にはフランドル派の巨匠・大ブリューゲルの「羨望」その息子ヤン・ブリューゲルの「ロジェールの祭り」ドイツ派の巨匠クリナッハの「ヴィーナスとキューピッド」など北歐ルネッサンスの名作がびらりと並んでおり、その魅力的な世界に、どっと押しかけた参観者もじっと足をとめて、見入っています。

54年目の帰国

李仁沫さん81歳。生活の糧を求めて日本に来たのは、大正7年27歳の時だった。明治43年、勢いにのる大日本帝国は、朝鮮半島を併合、同時に進められていた土地調査は大正7年に終了し、多くの朝鮮人農民が土地を失った。李さんもその一人だった。あれから54年、東京の下町で日本の歴史を生きてきた。李さんを昔から良く知っている町会長の平谷さんは

「大正12年の関東大震災に、日本人は多くの朝鮮人を殺した。李さんはまじめな性格をかわれて、会社の人がそっと逃がしてくれた。多くの友達を殺されてうらむはずなのに、李さんはうらみはしなかった」

第二次大戦の末期、日本の敗戦の色濃い昭和19年3月10日の大空襲でこの町でも700人が死んだ。

李さんは戦争の絶滅を祈り記念碑をたてた。戦後の李さんの生活は、人々への奉仕に明け暮れた。引上げ者の生活の面倒、子供達の遊び場の土づくり、あるいは、日本や、朝鮮の子供達の学校への多額の寄附など数え上げるときりが無い。町の人々は欲のない神様のような人だと言う。このような李さんを支えたのは、一環した皆友達だ、差別などないという友人愛の精神だった。一時、日本土になりたいといった李さん。

「おじいちゃんおばあちゃん何の便りもありませんがお元気ですか。今度、帰国船が再び実現して帰る決心がつかしましたか。必ず帰ってきて下さい」

海の向こうの孫の手紙に病気のおばあちゃんは、帰ろうと李さんに言った。李さんも年老いて日本に留まろうと言えなかった。今、老いた夫婦がその人生の大半を生きた日本をあとにして生れ故郷に帰る。大国の意志で国を奪われたり、分断されたりしてきた朝鮮半島。その度に悲劇をなめなければならなかった朝鮮の人々。

しかし今、雪どけがおとずれようとしている。悲惨な祖国の歴史のなかで散りじりにならなければならなかった肉親が会える日も近い。「日本と朝鮮の友好のための橋わたしになりたい」李さんが日本を離れる最後の言葉だった。朝鮮の人々の血と汗と涙を残して港を出る帰還船、それはまだ続く日本の歴史の傷跡なのだ。